

CORREL関数

使い方マスターガイド



※当ガイドに従うことで、法令違反がないことを保証する資料ではありません。
※あくまで参考としてご活用いただくことを想定している資料です。実際の制度内容は国の資料等をご確認ください。

CORREL関数の「役割」と基本構文

CORREL関数の「役割」と基本構文

CORREL（コレル）関数は、2つのデータ群の間に「どのような関係（相関）」があるかを、「-1 から +1」 までの数値で表す関数です。

=CORREL(配列1, 配列2)

引数	内容	例
① 配列1	1つ目のデータ範囲	気温の列 B2:B31
② 配列2	2つ目のデータ範囲	ビールの売上の列 C2:C31

 **覚え方のコツ：** 配列1と配列2は、必ず「同じ個数（行数）」でなければなりません。
行数がズれているとエラー（#N/A）になります。

【保存版】相関係数の「読み方」目安表

【保存版】相関係数の「読み方」目安表

相関係数（ r ）は、-1から+1の範囲で、データ間の関係の強さを示します。ここでは、算出された数値が「どのくらい強い関係」を示しているのか、一般的な目安表としてまとめました。

※分野によって基準は異なりますが、ビジネス分析の第一歩としてご活用ください。

相関係数 (r)	判定	意味
0.7 ~ 1.0	強い正の相関	一方が増えると、もう一方もかなり増える
0.4 ~ 0.7	正の相関	一方が増えると、もう一方も増える傾向がある
0.2 ~ 0.4	弱い正の相関	弱いが増える傾向はある
-0.2 ~ 0.2	相関なし	2つのデータに関連性は見られない
-0.4 ~ -0.7	負の相関	一方が増えると、もう一方は減る傾向がある
-0.7 ~ -1.0	強い負の相関	一方が増えると、もう一方はかなり減る

【必須】 数値だけで判断せず「散布図」を作る

【必須】数値だけで判断せず「散布図」を作る

CORREL関数は便利ですが、「たった1つの外れ値」によって数値が大きく歪むことがあります。数値を過信せず、必ずExcelの「散布図」グラフを作って、目で見て確認する習慣をつけましょう。

手順：

1. 2つのデータ列を選択する。
2. [挿入]>[散布図の挿入 (X,Y)] または [バブル チャート]>[散布図] を選択。

チェックポイント：

- 全体的に右肩上がり（正の相関）になっているか？
- ボツンと離れた異常なデータ（外れ値）がないか？

※外れ値がある場合は、除外してCORREL関数を再計算すると精度が上がります。

【注意】 「相関関係」 ≠ 「因果関係」

【注意】「相関関係」≠「因果関係」

データ分析で最も陥りやすい罠です。「相関がある（相関係数が+1に近い）」からといって、「原因と結果の関係」であるとは限りません。

例：「アイスの売上」と「水難事故の件数」には強い正の相関がある。

- 間違い：アイスを食べると水難事故が増える（因果関係はない）。
- 正解：どちらも「気温が高い」という別の要因（第3の変数）によって増えているだけです。これを「疑似相関（ぎじそうかん）」と呼びます。

結論：CORREL関数はあくまで「関係の強さ」を示すだけです。「なぜそうなるのか？」は人間が考える必要があります。

【免責】

※当資料に従うことで、法令違反がないことを保証する資料ではありません。

※あくまで参考としてご活用いただくことを想定している資料です。また当資料は、公開日時点の内容となっております。最新の情報、実際の制度内容は国の資料等をご確認ください。